

VERITAS STORAGE FOUNDATION 5.0 FOR WINDOWS SUPPORT FOR EXCHANGE 2007 README FILE

2007年5月16日

このパッチは、Storage Foundation 5.0 for Windows (SFW 5.0) による、Microsoft Exchange 2007 での VSS ベースのバックアップおよびリストア操作のサポートを提供します。このパッチは Microsoft Windows Server 2003 Standard x64 Edition、Enterprise x64 Edition または Datacenter x64 Edition を実行しているサーバーにのみインストールしてください。

SFW 5.0 および関連するサービスパックやパッチの最新情報については、Symantec テクニカル サポート Web サイト、<http://entsupport.symantec.com> を参照してください。

この Readme で説明するトピックは次のとおりです。

- このパッチで提供されるサポート
- パッチのインストール
- パッチのアンインストール

このパッチで提供されるサポート

Microsoft Exchange 2007 については、SFW 5.0 は Microsoft Exchange の以前のバージョンから提供されている Flashsnap ベースの VSS 操作をサポートします。このパッチは、Exchange 2007 の Local Continuous Replication (LCR) および Cluster Continuous Replication (CCR) の機能が有効な場合の、Microsoft VSS Writer に対するサポートを追加提供します。LCR と CCR は Windows Server 2003 (x64 Editions) を実行しているサーバーにおいてのみ利用可能です。

VEA GUI

Exchange 2007 のレプリケーションが有効な場合、アクティブストアライターやレプリカストアライターの階層は VEA GUI に正しく表示されません。このパッチを適用して Exchange 2007 のレプリケーションを有効にすると、Microsoft Exchange Writer の Microsoft Exchange Replication Service インスタンスの表示が有効化され正しく表示されます。これは VEA GUI に Microsoft Exchange Writer Replica として表示され、VEA のツリービューで VSS ライターノードの下位に表示されます。

Microsoft Exchange Writer Replica のノードを右クリックすると、コンテキストメニューに VSS スナップショット、VSS スナップバック、VSS リフレッシュの選択肢が表示されます。VSS リストア操作によるレプリカのリストア、およびレプリカの VSS スナップショットのスケジュール操作はサポートされていません。このパッチを適用した後、VEA GUI や SFW ウィザードにその他の変更はありません。

メモ: VSS スナップショットを使う前に、Prepare コマンドを実行する必要があります。スナップショットについては『Veritas Storage Foundation 管理者ガイド』を参照してください。

メモ: Solutions Configuration Center のクイックリカバリウィザードは Exchange 2007 に対応しておらず、このパッチをインストールしても変更されません。Microsoft Exchange 2003 によるクイックリカバリについては『Veritas Storage Foundation and High Availability Solutions Quick Recovery and MSCS ソリューションガイド Microsoft Exchange』を参照してください。

MSCS 環境

MSCS 環境では、正しい順序でフェールオーバーが行われるように、Microsoft Exchange データベースインスタンスの Volume Manager ディスクグループリソースに対する依存性を手動で設定する必要があります。

VCS 環境

VCS 環境において、SFW は Flashsnap ベースの VSS 操作をサポートします。ただし Exchange Virtual Server の名前は認識されません。このパッチの適用後は、Exchange Virtual Server の名前が Exchange 2007 の VCS リソース名として表示されます。

vxsnap CLI コマンド

このパッチを適用して Exchange 2007 のレプリケーションを有効にすると、新規の vxsnap CLI コマンドオプションを Microsoft Exchange Writer Replica (Microsoft Exchange Writer の Microsoft Exchange Replication Service インスタンス) または Microsoft Exchange Writer (Microsoft Exchange Writer の Microsoft Exchange Service インスタンス) のスナップショットの作成に利用できます。

このコマンドでは、レプリカのスナップショットの作成にレプリカストアライターを指定するか、またはアクティブストアのスナップショットの作成にアクティブストアライターを指定することができます。レプリカストアライターまたはアクティブストアライターが指定されていない場合は、「Microsoft Exchange Writer」がデフォルトとして使用されます。

たとえば、

```
vxsnap -x snapdata.xml create writer="Microsoft Exchange Writer  
Replica" component=SG1 backupType=COPY -E -O
```

では、レプリカのスナップショットの作成に VSS ライター、Microsoft Exchange Writer Replica が指定されます。

メモ: レプリカのスナップショットを作成する前にレプリカを含むボリュームで Prepare 操作を完了する必要があります。この操作は VEA GUI または vxsnap prepare CLI コマンドを使って実行できます。CLI を使用するときには、vxsnap prepare コマンドで Microsoft Exchange Writer Replica が指定される必要があります。

たとえば、

```
vxsnap prepare component=SG1/writer="Microsoft Exchange Writer  
Replica" source=L:/harddisk=harddisk2
```

のように指定します。vxsnap コマンドについて詳しくは、『Veritas Storage Foundation 管理者ガイド』を参照してください。

データベースのリカバリに対するレプリカのスナップショットの使用

レプリカのスナップショットは障害点までの Exchange データベースのリストア、またはポイントインタイム (PIT) までの完全な Exchange ストレージグループのリストアに使用できます。

レプリカのスナップショットは VEA GUI で VSS スナップショットウィザードを使用、または前述の vxsnap CLI コマンドを実行して作成できます。レプリカの

スナップショットを作成すると、レプリカが使用しているすべてのボリュームのスナップショットが自動的に作成されます。

レプリカのスナップショットからデータベースをリストアするには、まずストレージグループ上で [ストレージグループのコピーのリストア] を手動で実行してから、アクティブライターでリストアを実行する必要があります。(レプリカストアライターでのリストア操作はサポートされていません。)

当初 **SFW 5.0** ではリストア操作の前に手動でデータベースをマウント解除する必要がありました。このパッチを適用した後は、データベースのマウント解除がリストア操作の一部として自動的に実行されます。

メモ: VCS 環境では、このパッチを適用すると、リストア操作の一部として自動的にデータベースのマウント解除が実行され、リストアによる上書きを行えるようにデータベースが設定されます。ただし MSCS 環境では、手動でデータベースのマウント解除を実行し、リストアによる上書きを行えるようにデータベースを手動で設定する必要があります。

メモ: リストア操作中に **SFW 5.0** が自動的なデータベースのマウント解除に失敗すると、リストア操作も失敗します。手動でデータベースのマウント解除を実行し、リストアによる上書きを行えるようにデータベースを手動で設定した後も、リストア操作を再度実行できます。

アクティブライターでリストアを実行するには、**Exchange Management** シェルを使用して次の **cmdlet** を実行します。

■ データベースマウント解除 **cmdlet**

```
dismount-Database -Identity <DatabaseIdParameter>
[-DomainController <Fqdn>]
```

■ ストレージグループコピーリストア **cmdlet**

```
Restore-StorageGroupCopy
-Identity:<Server>¥<StorageGroupName>
-ReplaceLocations
```

ストレージグループコピーリストア **cmdlet** を実行するときのその他の注意事項

- ストレージグループコピーリストア **cmdlet** を実行すると LCR コピーが自動的に無効化されます。
- アクティブストアのスナップショットのスケジュールが存在する場合は、ストレージグループコピーリストア **cmdlet** を実行すると、スケジュールが無効化されます。スケジュールが無効となるのは、スナップショットを作成する **volume/plex** 情報が更新されないためです。この場合、ユーザーはリストア操作を実行する前に無効なスケジュールを削除する必要があります。

Exchange Management シェルと **cmdlet** について詳しくは次の **Web** サイトで **Microsoft Exchange 2007** の製品情報を参照してください。

<http://www.microsoft.com>

ストレージグループで [ストレージグループのコピーのリストア] を完了したら、**VSS** リストアウィザードまたは **vxsnap** リストアコマンドを使用してリカバリ操作を完了します。

メモ: このパッチを適用するとスナップショットからデータベースをリストアできますが、データベースログファイルのリストアはこのパッチではサポートされていません。

Exchange サーバー **Text Exch** 上の 2 つのデータベース **DB1** および **DB2** を含む、**Exchange** ストレージグループ **SG1** のレプリカのスナップショットから **PIT** リカバリを実行する手順の例は、次のとおりです。

- 1 データベースの **DB1** と **DB2** にデータベースマウント解除 **cmdlet** を実行します。


```
Dismount-database -Identity TestExch¥SG1¥DB1
Dismount-database -Identity TestExch¥SG1¥DB2
```
- 2 ストレージグループの **SG1** にストレージグループコピーリストア **cmdlet** を実行します。


```
Restore-StorageGroupCopy -Identity TestExch¥SG1
-ReplaceLocations
```

- 3 データベースの DB1 と DB2 にデータベースマウント cmdlet を実行します。
Mount-database -Identity TestExch¥SG1¥DB1
Mount-database -Identity TestExch¥SG1¥DB2
- 4 更新を実行します。
vxsnap refresh
- 5 レプリカのスナップショットを使用して VSS リストア操作を実行します。
vxsnap -x snapdata.xml restore RestoreType=PIT writer="Microsoft
Exchange Writer"

メモ: この例では、レプリカのスナップショットが次のように実行されると仮定します。

```
vxsnap -x snapdata.xml create writer="Microsoft  
Exchange Writer Replica" component=SG1 backupType=COPY  
-E -O
```

MSCS 環境では、データベースをリストアするときに、その他の注意事項があります。

- 更新操作を実行した後は、リストア操作を実行する前に手動でデータベースをマウント解除する必要があります。
- CCR が有効な場合は、データベースをリストアする前に循環ログ機能を無効化する必要があります。

パッチのインストール

この項ではこのパッチのインストール要件と手順について説明します。

インストール要件

このパッチをインストールする前にこれらをインストールする必要があります。

- SFW 5.0 または SFWHA 5.0
- SFW FlashSnap 機能
- Microsoft .NET Framework バージョン 2 (x64)
デフォルトのインストール先 (%SystemRoot%\Microsoft .NET)

通常は、このパッチをインストールする前か後かにかかわらず、**Microsoft Exchange 2007** をインストールできます。ただしクラスタダイナミックディスクグループにあるボリュームにシングルコピークラスタ構成を設定するときは、**Exchange 2007** をインストールする前にこのパッチをインストールする必要があります（このパッチの適用が、シングルコピークラスタ構成に **Exchange 2007** をインストールする前提条件です）。

Microsoft Exchange 2007 のインストール要件について、詳しくは <http://www.microsoft.com> で製品情報を参照してください。

インストールの手順

このパッチをインストールするには、**SFW 5.0 Exchange 2007 support.msi** を実行します。

- コマンドラインからパッチをインストールするには、**msi** の場所に移動し、適切なログファイル名で次のコマンドを入力します。

```
msiexec /i "SFW 5.0 Exchange 2007 support.msi" /log  
<logFileName>
```

インストールを完了するためにシステムの再起動を要求されます。
- サイレントモードでコマンドラインからパッチをインストールするには、**msi** の場所に移動し、適切なログファイル名で次のコマンドを入力します。

```
msiexec /i /quiet "SFW 5.0 Exchange 2007 support.msi" /log  
<logFileName>
```

システムが自動的に再起動され、インストールが完了します。

パッチのアンインストール

この項では、このパッチのアンインストールの手順について説明します。

アンインストールの手順

このパッチをアンインストールするには、**SFW 5.0 Exchange 2007 support.msi** を実行します。

- コマンドラインからパッチをアンインストールするには、**msi** の場所に移動し、適切なログファイル名で次のコマンドを入力します。

```
msiexec /x "SFW 5.0 Exchange 2007 support.msi" /log  
<logFileName>
```

アンインストールを完了するためにシステムの再起動を要求されます。

- サイレントモードでコマンドラインからパッチをアンインストールするには、**msi** の場所に移動し、適切なログファイル名で次のコマンドを入力します。

```
msiexec /x /quiet "SFW 5.0 Exchange 2007 support.msi" /log  
<logFileName>
```

システムが自動的に再起動され、アンインストールが完了します。